

那津久佐

「うた」歌集第一

不識書院

那津久佐

「うた」歌集第一

不識書院

うた叢書第三篇

那津久佐 なつくさ 「うた」歌集第一

一九八二年九月三〇日発行 ©

編者——「うた」歌集編集委員会

発行者——中静 勇

発行所——不識書院

東京都千代田区神田小川町三ノ二 〒101

電話 東京二九二—九一〇三 振替 東京五—一九〇九九五

印刷——錦明印刷 製本——梓製本所

定価——一八〇〇円

序

今日という時代を生きる人間の感性によって、さまざまな現実対象に、どれだけ生命を与え得るかというのが、わたしたちの短歌制作の目標である。そのことによって、わたしたちは、自分の存在と、現代世界における人間の存在を証明することが可能だと信じている。その一端として、一九七八年から八二年に至る五年間の作品を、ここに撰んで一冊の集とした。これが、わたしたちの微かな第一歩である。

一九八二年八月十二日

「うた」歌集編集委員一同

新年・春	3
夏	15
秋	27
冬	37
禽獸	47
旅	55
食物	63
家族	71
職業・労働	81
社会・戦争	89

人物	99
戀愛・性	107
習俗	113
文芸・歴史	119
器物・静物	129
述懷	135
疾病	145
老	151
挽歌	157
雑体	163

那
津
久
佐

新年・春

渡辺恒子

湯わかして佳き茶いれる元旦のひとり心よ雪掃きし後

佐藤矩子

蛇口より水ほとばしりいさぎよし歳のあしたの青菜を洗ふ

森川みゆき

元旦にひとり目覚めてうかららに焼くべき餅を心に数ふ

菅本光子

さき歩む乙女の日本髪^{かみ}のびらびらに元日の陽のゆれ動くなり

玉城徹

元日を冬木のうれにあはあはと湧ける白雲見れど動かず

長谷川 クラ子

ゆりの木の高きこずゑに去年の実はあらはに立ちて鳥影うごく

島 村 朝子

湯屋ひらく合図の太鼓とどろきて年の旦を人ら群れ行く

松 本 茂

元旦の桂浜辺に孫四人貝拾ひてはわれに手渡す

大西 瑠璃子

街川に舫ふ小舟に飾りたるその注連縄は水に映りぬ

山 下 文 三

切株に茸出でたる桃古木雨に濡れをり正月二日

松下 ふみ

一年^{ひととせ}をまた見ざらむと惜みつつ八重垣姫の羽子板しまふ

棟 幸子

はるかなる沖合にして流水の白きらめけりこの海明けは

宮 坂 節

信濃路にみ冬尽きぬと朝あけの庭掃きをれば山鳩の啼く

土 生 育 三

桑の株いまだ芽吹かぬ畑の端^はに梅数本^{すほん}立ち花の香ながる

井 上 千 恵 子

梅畑に立てばながるる花の香にわれに残れる生^よを思ひけり

高橋 トシ

墓の子の二つが出でて並びをる梅の木の下夕べ明るし

玉城 徹

思ひをりパウル・クレーの天使など三月の陽に枯葉かがやき

幸田 麗子

色刷りの種の袋を選びつつをみなへしあればふるさと思ふ

篠田 常世

春浅き蹉跎の海よりこしめじなその尾びれもて流しを叩く

山下文 三

雛の夜にふりいでし雪あさみれば桃のこずゑにうすらにぞのる

山本雅子

水を干し墓すませじと朝の髪くしけづりつつわれは企らむ

玉城徹

老いづきし男らありて春さむき羅漢の山に枝おろしせる

幸田麗子

山葵田にわさびの苔ふるへつつせせらく水は音ぞひびかふ

中村美穂

れんげ田に土佐の媼らごぎ敷きて酒くむらむか彼岸ぞけふは

野村恵

そそり立つ石槌山を遠巻きにけふらふごとしぶなの芽吹きは

荒浜たかみ

たてがみのなびかふごとき尾根の木木けぶりては見ゆいまか芽吹かむ

高瀬由香

新入生瞳かがやく坂みちにマロニエ萌ゆる思ひて飽かず

渡辺恒子

ひと朝にラディッシュの芽の萌えいでてその細き茎すでに赤しも

竹林俊浩

霞みつつ雲居る空に連なれる畑中に立ちレタスの葉めづ

山本雅子

もとほりて虚子のおくつきに出でにけり芹あをあをと供へられたり

藤野久江

かぶせ置く落葉のひまに細き芽は秋冥菊の株にふきたる

溝淵英子

鶏頭の芽の萌ゆるかと夕暮れの学級園に屈まりてゐつ

稲葉育子

詮もなき石頭よともてあまし寝ねし一夜に花ひろごりぬ

高瀬由香

イグナチオ教会いでて駄までを並木の桜一つ散り来ず

大西瑠璃子

駄土手の桜ふぶきのとびきたりここの草生にあかるく溜る